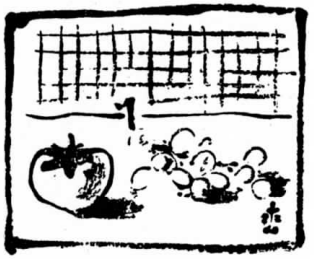

ルンペン雑考

郡昇作

一、結果から觀たルンペン其三
A、行商と奔走
旅烏とその日記
結語
B、ルンペンの移動
移動の例其一
移動の例其二
移動の例其三
移動の例其四
移動の例其五
移動の例其六
移動の例其七
二、結果から觀たルンペン其四
A、麻痺した人々
ルンペン・フアイア
皮膚覺
聽覺
視覺
一錢もしない生命
イ、顏見て大喧嘩
ロ、五錢で喧嘩
ハ、酒かへせ
ニ、無斷で下駄履いた
ホ、鋏で刺殺す
ヘ、阿波座の殺人
ト、拾ひ屋の殺人

チ、屑拾ひを慘殺
リ、二人掛りで撲殺
ヌ、ナイフで刺す
ル、怪死人
ヲ、切出しで刺す
ワ、庖丁で刺す
カ、斧で殺害
ヨ、血塗れ男
三、結果から觀たルンペン其五
A、落ちもの拾ひ
家出少女の貞操
夜道の娘
天王寺公園で
用達し中の婦人
ヒヒ爺
家出娘
青樓の娘
親切ごかしに
田舍娘を誘拐
菓子で釣り出し
便所の怪異
哀れ白痴娘

一、結果から觀たルンペン（其三）

A　行商と奔走

果實、八百物、魚類、野菜、油、小間物、吳服等の行商は荷車自轉車、天秤棒、背等を利用して營まれ、それ〴〵の商品によつてバナナ行商、水瓜行商、八百物行商、駄菓子行商、鰯行商、玩具行商、小間物行商等と呼ばれるほか、行商の方法や行商用具に依つて荷車行商、自轉車行商、天秤棒行商、背負ひ行商等とも云はれて居ります。鰯と鯛の花の行商は自轉車行商の代表的なものであり、アイスクリームと笠魚は夏の天秤棒行商の代表的なものでせう、一年を通じての天秤棒行商の代表的なものには煮豆行商があります。吳服と藥は背負行商の代表と云へませう。屋臺店行商にはうどん、ぜんざい、甘酒、飴湯、洋食燒、廻轉燒、どて燒關東煮、すし、餅等があります。これ等は各れも屋外に客を呼び出すか、戸口で商をするものでありますから之を戸外行商、戸口行商と申して居ります。

然しルンペン達のして居る行商には以上の外更に低級なマッチ、タワシ、針、石鹼、ノート、玩具等の手提げ行商等があつて家の中へ入り後を閉めてから商をする戸内行商とも云ふべきものが多いのです。

家に主婦一人しか居ないときには之が强盗に早替りをしたり、家人が不在のときは空巣ねらひとなる恐れがあると云はれて居ります。そうした元氣なルンペン行商人の外に不具者と老衰者の行商があります。跛、片目、よぼよぼの爺さんの行商はまことに不自由に見え哀れを催させます。この哀れさに集まる同情を種として安價な粗品を高價に賣る不德なものもあります。ところが一層惡いことには家庭的なものがよいと考へて石鹸を持つて行くと「そんな品よりももつと儲かる品があるから之を賣りなさい」とすゝめる人があり、タワシを持つて行くと「針が欲しいのですが」と要求して針の行商人に轉じさせる人のあることです。上等の針では儲からないので松屋町筋で買入れた壘針から木綿針、絹針と一通り揃へた一包原價三錢のものを拾錢に賣りに參ります。針が一番利益が多いと云はれて居ります。此の針の行商で東京から山口まで三年掛つて行く間に百五拾圓を貯蓄したものがあります。

ところが行商品目の變化や品質の低下よりも更に恐るべき結果を行商人自身に招來するものに喜捨ならぬ嫌捨があります。『マッチは不要ませぬから利益だけ差上げます。壹個賣つていくらの利益があるのですか』と尋ねます。澤山利益があるとは云へないので『壹錢です』と答へると、『それでは』と一錢を惠むのです。中には高い不要品を買ふよりもと『いりませぬから之を持つて歸つて下さい』と一錢を直ぐに差出される方もあります。こゝで行商人は資本不要の商賣を覺えます。そして一個か二個のマッチを手に行商に出かけます。『いくらですか』と尋ねられると叱驚りする程の値段を吹き掛けます。そして買つてくれるまで、意地惡く、執念深く、ねばり强く、相手が恐怖心に包まれてしまふまで微動だもせず、一錢をせしめるまで立ち去りも致しません。之が奔走です。奔走に走る主なる徑路は以上の通りでありますが、生活困難の爲めに何んでも買つて貰はなければ生活が出來ないと努力する熱心さがその人を奔走に類する行爲に至らしめることもあります。面會强要、押賣謝絶の必要は何人が責任を負ふ可きでせうか？

旅烏とその日記

頭の良い奔走になりますとマッチや石鹸は持つて行きません。一品拾錢ですから、不要なものに拾錢支拂ふよりもと考へてか少くとも貳錢を與へられます。大抵の家では五錢を惠んで下さいます。Sは人夫仕事が切れて生活に困ると本州、四國、九州、北海道は勿論のこと朝鮮、樺太と全國の都市から都市へ、裁判所の判檢事や縣廳の役人の官舍ばかりを奔走して廻りました。丁寧に溫順に『旅に難儀を致して居ります。一つ買つて下さい』と頭を下げます。そして浮浪者として檢

束から免れる用意として、何月何日には何處で賣つたと一日も欠かさず日誌をつけて居ります。彼だけではありませぬ。總ての膝栗毛で旅をする旅烏は日誌をちやんとノートにして居ります。浮浪者ほどノートを大切にして居るものはありませぬ。そしてその日誌には毎日の收入と働き場所と賃金支拂人と泊りの場所を記入するほか國民精神總動員に應はしい樣な格言や訓話を書き入れて居る者もあります。昔の關所は箱根であつたが、今日の浮浪者の第一の難關は京と滋賀の國境大津だと申して居ります。

結語

行商は奔走となり易く、奔走は乞食となり易いのです。襤褸を着て行商するよりも僧服を纏つて乞食をして行く方が生活が樂です。人々は、斯んなにして歩行の困難な不具者に、歩行を必要とする行商人や、奔走や乞食をしてでないと生活を得さしませぬ。何といふ殺生でせう。何といふ無駄を平氣でして居ることでせう。と語る權八氏があります。職業紹介事業が國營になるが、その職業紹介所の紹介網から漏れたこれ等の人々の爲め授職所でも建てゝ、どうせ能率の上らない人々だから欽損は補給の方法をつけて、個人としても國家としても、もつと有意義な職業に從事せしめ、恥しい思をさせたり、苦しい目にあはせたりしないで、人生を樂みながらより强大なる國家への進展に寄與せしむる樣に計畫して指導して戴ければと思ふことが時々あります。

B　ルンペンの移動

ルンペンほど移動の激しいものはない。彼等ほど放浪癖を多分に持つて居るものはないと大抵の人は申します。然し遊牧民族の血を繼承して居るものはいざ知らず、農業民を祖先に持つ私達は定着性を失つてしまつて單なる放浪癖の爲めに放浪しつゝあると云へるでせうか？　成程新しい文明と新しい產業は交通機關の發達と生活難を生んで人々の移動性を著しく增加致させました。これは事實です。然し我國のルンペン氏達は生活さへ出來れば定着しよう定着しようと致します。彼等に寢所を提供する宿泊施設は開所以來出て行かうとせぬ者が多い爲めに困つて居ります。日本全國各れの宿泊施設に於きましても毎日々々殆んど同じ者のみを泊めて新しい者は泊めないのではないかと考へられ易い程であります。宿泊を拒絶しても又泊めて吳れと申し出て參ります。單なる放浪癖による移動は少いと思ひます。浮動性は社會的事情、殊に職業的要求と家庭の事情に依るものが多い樣に思はれます。中には自然的原因によるものもあり生理的原因に依るものもあります。地理的關係による季節的移動もあります。これ等の移動の原因は總てルンペンに顚落の原因です。資產もない家庭に生れて、

充分の教育も受けられず、適職を發見する機會もなく、保護者も保證人も、忠告者も指導者もなく、窮迫した生活に追はれて、口腹の爲に、環境の要求に應じて、地方の仕事を日稼ぎつゝ移動したものが多いのです。人夫として仕事を求めて移動した者や、土工として道路工事、鐵道工事、水力電氣工事、工場建設工事等を完成する爲めに次から次へと移動したものや、手傳として移動したものがあります。山蟹、煙管、飴、糊、藥、玩具、ノート、鉛筆、マッチ、石鹸、針等の行商をしつゝ生活を求めて移動したものもあります。鋸目立や塗工として全國を移動するものもあります。不具の爲めに、老衰の爲めに、病氣の爲めに生活と慰安と信仰を求めて移動するものもあります。熱帶地方の植物を溫帶地方に移植する爲めに移動する者もあります。委節的移動の一つの顯著なものには雪國の人々の冬季の都市への出稼があります。酒の仕込の樣な一時的の仕事や、飯屋其他の一時的な移動性の多い職業に就いて暖かくなつてから歸國致します。ところがそうした出稼中のものに病氣になつたり、金を失つたり、不心得の爲にルンペンに顚落する者も出來て參ります。養蠶時や田植時に一時出稼ぐ者もあります。地震、火災等の自然的原因の爲めに命からがら移動する者もあり、低腦、放浪癖、寢小便等の個人的欠陥の爲めに移動する者もあります。二三の實例に依つて如何にして移動したかを報告申し上げたいと存じます。

移動の例　其一

三根手津太郎君は明治十四年九月十四日に三重縣の一志郡で生れました。彼の父は古道具商をしながら菓子の製造も致して居りましたが彼が五歲のとき病死したのです。それで其後は母の兄に養育されて來ました。鄕里の久井小學校を卒業すると直に松坂町の大和屋菓子店の見習となつたのでした。母は彼が十五歲になつたとき父の許へ死んで行きました。家庭に惠まれない彼の人生はスタートからして橫へ曲つてしまつたのです。幼少のときに兩親に死別したことは此上もない不幸です。これがルンペン生活に入つた第一の原因です。ところが二十歲のとき冷込が因で寢小便をする樣になり、恥しくて店に居たゝまらず逃げる樣にして主家を飛出したのでした。そして其後は三重縣や和歌山縣の片田舍の菓子店を訪ねて彼處で十日此處で一年と轉々として仕事を追うて移り變り終に大阪にたどりつき、松屋町の豆板屋や洋菓屋で働く樣になつたのです。彼の自慢の一は此の間に神戸湊川の有名な一流饅頭店の職人として働いたことがあることです。彼の移動は田舍の菓子の職人として、次から次へ仕事を求めて歩いたことにあると思ひます。だが然しルンペン生活に入つた第二の原因は寢小便をする樣になつたことにあると思ひます。この爲めに彼は浮草の

樣に田舍の菓子店をあちらこちらと渡り歩いて居たのです。第三の原因は二十歲のとき石の破片が目にはいつて左眼を失つたことにあります。不具となつたことがどの位人生を暗くしたことでせう。第四の原因は妻が死亡したことです。このときから燈火が消えた樣に彼の人生から希望が全然消失してしまつたのです。がつかりしてしまつた彼は自暴自棄にならざるを得なかつたのです。何故に總てが彼のみに辛く天から報いられるのか？　神は？　佛は？無いのかと地に伏して泣き濡れたことが何回となくあつたことか。今までは不幸に巡り遭ふ度に奮ひ立つたが、今度といふ今度は完全に打ちのめされてしまつまたのです。飲まなかつた酒もこれから呑む樣になりました。總てを忘れたかつたのです。自分自身を持て餘してゐたのです。賭博もこの頃からはじめました。そして六ヶ月と一ヶ年半の體刑を二回も受ける樣になつてしまつたのです。これが第五の原因です。自暴自棄と酒と賭博と前科が更に彼をルンペン生活から更生せしめない樣に縛つてしまつたのです。而も今では早や五十七歲です。頭髮も白くなつてしまひました。失業年齡を過ぎて死亡年齡に近づいてゐるのです。これが第六の原因です。年寄を雇ふ人はないからです。それに昭和十一年の十一月に貨物自動車に衝突して額に傷を受けてからといふものはよぼ〳〵の爺やになつてしまひました。これが第七の原因です。彼は今では無能力者となつてしまひました。屑拾をしたり、巡禮となつたり、時には便所の掃除をさせて貰つてやつと生きて居るに過ぎず、慈悲深い死神のお迎へを待つてゐるばかりです。

移動の例　其二

源次郎君は明治三十一年の六月一日に京都で仲仕を父として生れ、十五歲のとき父と共に來阪して、毎日々々父の車の後押をしてゐたのです。ところが知らぬ間に大人になり、いつとはなしに仲仕になりきつて居る自分を發見したのです。此の日稼仲仕になつたことがルンペン生活に入つた第二の原因です。第一の原因は母が二歲のときに死んでしまつたことです。母の愛を知らない彼は不幸でした。父親との二人暮しは彼が二十八歲のとき父の死によつて終を告げました。彼は天涯孤獨となつたのです。これが第三の原因です。何處の馬の骨か牛の骨か解らないものを住込ませる雇主はないのです。仕事がひまであぶれる日が毎日續きました。それで家を疊んでしまはなければならなくなりました。經濟界の不振が第四の原因でした。彼は人に教へられて糊謨の行商をする樣になつたのです。自分でに護謨糊を作つて東京、仙臺、青森、秋田、新潟と殆んど全國を廻つて來たのです。彼の移動は生活の爲めの移動でした。放浪癖によるものでなく生活を主としたものでした。然し永年の間に旅を何とも思はなくなつたのも事實です。

彼は來阪後三日目に病氣になり、無一物となつて宿屋住居も出來ず屑拾に落ちたのです。病氣になつたことがルンペン生活に入つた第五の原因です。金が出來次第護謨糊の行商に出るのだと申して居ります。

移動の例　其三

清君は昭和十二年に四十九歳になりました。長野縣に生れたが、母には九歳で死別して淋しい一人ぼつちの男となつてしまつたのでした。勿論親類もないのです。それで二十三歳のとき妻をもらつて淋しい人生に潤ひを得たのでしたが、それも束の間、二十六歳のとき押しせまる生活苦の爲めに妻と別れなければならなくなつたのでした。彼の苦惱は結婚當時樂しかつただけにそれだけ大きいものでした。人生と云ふものははかないものだ。嘘の塊だと考へても考へても諦められないのです。彼が自暴自棄になつたのも無理からぬところがあります。然し生きるためには働かねばなりませぬ。養蠶時には山梨縣や群馬縣に出稼ぎ、蠶が終ると村に歸つて土工や運搬夫となつて日稼いだのです。そして三十二歳になつたとき終に不況の爲めに家を疊んで、唯だ食ふ爲に、目標もない旅に出なければならなくなつたのです。彼が斷腸の思を舐めたのは之が二度目です。當分の見納めだ、又歸つて來るのだ、今度は立派になつて歸つて來るのだと元氣に自分自身に言ひ聞かせても、故郷を去る淋しさは村境に來たときに一しほ深かつたのです。死んでもよい身だ、旅に出れば何とかなろう、何ともならないかも知れないと空腹を抱へて歩いてゐる中に初めて靜岡方面で鐵道工事に仕事を見つけることが出來たのです。働いて居ると繕てを忘れることが出來ます。彼は沼津、三島、箱根の鐵道工事、熱見の丹那隧道工事、伊東線の工事、山梨縣で中央線の工事や小海線の工事、豊橋線の工事等に從事したのです。ところが寒さの爲めにある冬神經痛を起し、一時は歩行さへ困難となつたが、だん〳〵暖くなるにつれて小康を得たので、豊橋から岡崎、衣、名古屋、八日市、桑名、津と、輕易な仕事を拾ひつゝ關西へ移動して來たのです。津からは野田村へ六里、伊賀上野へ六里、長野峠へ五里、名張へ五里、初瀬へ八里、櫻井へ三里半、高田へ四里、俵本へ三里、半高田へ四里、俵本へ三里、丹羽まで三里、奈良へ二里、郡山へ一里半、王子へ四里、柏原へ二里半、平野へ三里半と野宿を重ねて來阪しこれから和歌山へ仕事を探しに行くのですと語るのです。途々仕事をしてゐる現場で頼んで働かせて貰うのですと語るのです。和歌山から先は何處を何う仕事を拾つて行くでせうか。一生の間に腰を落ちつけて働けるところがあるでせうか。讀者の皆様、彼の爲めに幸福を祈つてやつて下さい。

移動の例　其四

乃利多賀君は四十三歳になつて初めてルンペン生活を味ひました。三年前に三歳になる男兒を殘されて妻に先立たれたことがその原因の一であると思ひます。那覇市の材木屋に生れ何不自由なく成人して、父が死ぬまでは家業の手傳を唯一の樂みとして居つたのです。然し父の死亡後は化粧品商をしたり、農園を始めたりして生活を曲りなりにも營んで參りました。毎年夏期に郷里の熱帶植物を神戸や大阪に積出して之を賣り、化粧品や其他各種の雜貨を仕入れて歸國し、之を賣つて大都市の文化を郷里に傳へる役目をしてゐたのです。農園の經營者であり、化粧品商であると云ふのは斯うした理由によるのです。ところが今年は植物を船中で腐敗死させた爲めに失敗をしてしまつたのです。これが第二の原因です。それに夏休みに母のない子供一人を郷里に殘して置くこともならず、都市の見物にと連れて來た子供が病氣して二進も三進もならなくなつたのです。××の安宿に泊つて居たが子供の病氣の爲め、十日分の宿料が滯納したので退宿を要求されたのです斯んなにして彼は移動し、斯んなにして彼はルンペンに顛落したのです。子供は無心に毎日の屑拾を、父の背で樂しそうに眺めて居ります。

移動の例　其五

多計次郎君は四十五歳になりました。君の郷里は東京です。淺草の小學校を卒業すると直に附近の製材工場の見習工として住込みました。給料は毎月十五圓を支給されて何不足ない日が續きました。二十一歳のとき甲種合格で近衞歩兵第三聯隊へ入隊したのは此の工場からでした。二年後一等兵となつて除隊してからは自力で製材業を始めたのでした。鍛へた腕と精神で隆々と成功への道を登つて行くかに見へたとき突如と大震火災に遭ひ妻と二人の娘を失つて自暴自棄の男となつてしまつたのです。惜しいことをしたものだと思ひます。そして春から夏にかけては、來る年も來る年も北海道の小樽、クシロ、帶廣、根室、室欄、旭川方面へ伐材人として、また運搬夫として出稼ぎました。樺太の豊原や本通や眞岡方面に出稼いだこともありました。伐材が終ると東京へ歸り休養の假もなく、再び旅仕度を新にして、今度は秋から冬にかけて、福島、秋田、新潟、長野、岐阜、高山、福井、舞鶴、廣島岡山、姫路、神戸、大阪と製材の仕事や、丸鋸、帶鋸等の修繕仕事を探して歩くのでした。ですから彼のルンペンへの顛落の原因は東京震火災と妻子の死亡と職業的關係と年齢と保證人の關係にあるといふことが出來ます。此のルンペンに顛落の原因が彼を放浪さす原因となつて居るのです。

移動の例　其六

於利太郎君は明治十四年十月七日に德島縣の板野郡で生れまし

た。今年は五十八歳です。郷里の小學校を卒業すると直に帆船の船員となり四十歳まで海上の生活を續けて參りました。海上から陸へ上り名古屋のある丸帶工場の炊事夫として住込みましたのは年齢の關係もあつて海上生活に適しなくなつた爲めです。此處で一年辛棒して、次は春日井のモスリン工場の炊事夫となり、次は一宮市の播磨屋の炊事夫となつたのです。が此處も都合で失業してしまひました。それで其後は名古屋で玩具の行商を永い間致して居りました。玩具が賣れ渡ると買手が少くなつたので紙鐵砲や寫眞の種紙を賣りながら三重縣から和歌山へと廻つて來たのです。然し生活費さへも儲けることが出來ず日々食込む一方で僅かの資本金も失つてしまつたのでした。それで此處で山蟹を捕へて大阪へ賣りに來たのです。ところがやはり賣れないのです。飯を滿足に食ふことさへ出來ないのです。それで食ふ心配の少い屑拾に落ちたのです。彼の移動も食ふ爲めの移動で放浪癖に依るものではないのです。ルンペンに顚落の原因が移動の原因です。これを列擧すると次の樣なものになりませう。

イ、老衰して居ること
ロ、失業年齢にあること
ハ、保證人が大阪市内にないこと
ニ、妻子も身頼もないこと
ホ、定職のないこと
ヘ、前職が本人に適して居なかつたこと
ト、貯蓄のなかつたこと
チ、其　他

移動の例　其七

比良田四加三君は明治二十三年二月三日に左官職を父親として極めて貧乏な家に生れましたが、理解ある父の情けで無事に有隣小學校を卒業させて貰ひました。此の小學校を卒業するまでの十數年間が彼には最も幸福な最も永い年月であつたのです。といふのはこれから先は不幸續きであつたからです。十六歳のときに母に死別致しました。そして其後は土工して働いてゐたのです。ところが十九歳のときダイナマイトで右眼と右手の親指、紅差指と小指を失くするし、更にこの年に父をも失つて天涯孤獨の身となつてしまつたのです。それで平素から憧れてゐた東京へ生活と慰安を求めて走り大都の四谷目附で總てを忘れようと工夫となつてひたむきに働いたのでした。鐵道工事が完了した翌日彼は徒歩で栃木の絹川水力電氣工事現場へ向ひ、こゝで二十五歳を迎へました。工事が完了するといふ樂しみに精一杯働いたが、工事が終ると、別れを告げる淋しさと、次の仕事を探さねばならぬといふ不安と、新しい仕事場に對する期待を混へたまことに印象深いものを毎度

味ひつゝ今度は福島縣の八代水力電氣工事現場に現れこゝで二十九歳を迎へるまで働いたのでした。で次は長崎縣の松島炭坑で七年間、高見炭坑で昭和十二年の一月まで働いたのでした。高見炭坑を辭したのは故郷戀しさの一念からでした。郷里へ歸つてホームシックを癒した彼は再び仕事を求めて旅に出で大阪へ來て今宮の安宿に腰を下し、毎日を就職に奔命したのです。然し土地不案内ではあるし、保證人も、身頼も知人もなく、不具者ではあり、年齢は既に四十八といふ失業年齢に達して居る爲め何處へ行つても、何と依頼しても使用者はなく、終に少々の持金も使ひ果しその上風を引いて發熱し何とも出來なくなり、所持品も、身に着けて居るものも全部賣り盡しルンペンに顚落し、軒下の塵箱を堺市までも足を延して漁る身の上となつたのです。　（以下次號）